

「教授を魅了した大地の結晶－北川隆司鉱物コレクション－」開催報告

江越航*

概要

2014年11月15日～2015年1月12日、当館で開催した企画展「THE結晶展」の中で、「教授を魅了した大地の結晶－北川隆司鉱物コレクション－」と題した鉱物コレクションの展示を行った。これは、故北川隆司広島大学教授が収集した鉱物コレクションで、全国を巡回している展示会である。本稿では、この企画展の概要について報告する。

1. はじめに

当館では、2014年11月15日(土)～2015年1月12日(月)の間、企画展「THE結晶展」を開催した。この中の1コーナーとして、「教授を魅了した大地の結晶－北川隆司鉱物コレクション－」と題した展示を行った。これは、故北川隆司広島大学教授(1949-2009)が収集した鉱物コレクションをもとに、全国を巡回している展示会である。北川教授は、鉱物学の基礎から地震・災害・環境問題まで幅広く研究するとともに、熱心な鉱物収集家でもあり、その生涯にわたって世界各地におもむいて収集した鉱物コレクションは2000点余りにのぼる。今回の展示会は、膨大なコレクションの中から、自然の造形美・不思議を感じることができる標本約200点を特に選んで展示したものである。

この展示会は、2013年6月での広島市子ども文化科学館での開催を皮切りに、国立科学博物館が中心となって、全国の博物館を巡る企画展である。

以下にこの展示会の概要、特に当館で実施するにあたり、準備したことがらについて報告する。

2. 展示ケース準備

今回の企画展では、鉱物200点余りを展示するケースが必要になる。

この企画展は巡回展であり、当館での開催の前にも、他の博物館において開催されていた。4月19日～6月1日までの期間に、豊橋市自然史博物館において開催されていたことから、事前にここでの展示の様子を

調査に伺った。

こちらの博物館では、資料展示のために120×60cmの大きさの展示ケースが11台、85×60cmのケースが7台、180×100cmのケースが3台使用されていた。また、巡回展で最初に企画展を実施した広島市子ども文化科学館では、150×60cmで2段の展示ケースを6台、180×60cmで2段の展示ケースを10台使用したとのことであった。

これより、展示ケース全体の面積としては17万cm²程度が必要と見積もった。展示は2ヶ所に分けることにし、地下一階の無料コーナーに一部を展示、メインの展示は4階のサイエンスギャラリー前で行うこととした。

使用した展示ケースは

○4階メインコーナー

- ・ 140×60cmのケース6台。すべてLED照明付き。
- ・ 140×50cmで2段のケース2台。ただし、実際には安全性を重視し、1段で使用した。
- ・ 古代の宇宙観のコーナー、およびその横の古代・中世の科学の「古代の科学技術」「時と暦」の常設展示ケース

○地下一階

- ・ サイエンスギャラリーの常設ケース2台。なお、この展示ケースには朝に直射日光が差し込むことから、ケース前面にUVカットフィルムを貼った。
 - ・ 展示場改札横の大型常設展示ケース。ここには、コレクションの中でも主に大型の鉱物を展示した。
- 以上の展示場所を、実際に列品する日までに準備し、必要な展示ケースをあらかじめ配置した。

*大阪市立科学館学芸グループ
e-mail:egoshi@sci-museum.jp

3. 搬入

資料は、11月6日(木)に前展示場所である香川大学博物館より科学館に運び込まれた。

資料の数は、段ボール箱70箱分(うち64箱のサイズは44×31×31cm)で、これに梱包材等が入った段ボールが30箱あり、合計100箱ある。資料の数が多ことから、搬入計画についても事前にシミュレーションを行った。

実際に列品するまでに、これらの梱包資料を2段積み以下の状態で数日間保管する必要がある。このためのまとまった場所が必要になることから、必要となるスペースを検討した結果、オムニマックス映写室に保管用の場所を確保した。

一方、搬入は通常の営業時間内に行う必要があることから、来館者との接触を避けるため、トラックからの荷物は、一旦工作室に搬入した。その後時間帯を見計らって、同日中にオムニマックス映写室に移動させた。

4. 列品

標本の開梱、列品は、標本を熟知している国立科学博物館の宮脇律郎氏、門馬綱一氏、北川研究室の卒業生である大阪大谷大学の地下まゆみ氏に作業していただいた。

これは、標本には多くの易損品があり、直接触れて良い部位、底部にしても良い部位があって、その部位を守らないと、標本を破損、汚損する恐れがあるためである。

列品作業は、標本の破損事故のないよう、科学館の休館日である11月10日(月)に行った。

標本の配置は、こちらで用意した展示ケースの配置を元に、適宜、単体・元素鉱物、硫化物、珪酸塩、炭酸塩等に分かれるよう並べていった。

列品にあたって標本に関する解説は、鉱物名と元



写真1 列品された資料の一部

素組成、原産地が記載されたプレートを配置するにとどめた。これは説明が詳しくすぎると、かえってそれを読むのに注意が向いてしまうため、解説ではなく標本そのものをじっくり眺めてもらうようにするためである。

5. おわりに

以上のような経緯を経て、標本の破損もなく、無事企画展を実施することができた。

来館者の反応もよく、展示ケースの間近から熱心に鉱物を見ている様子が見えかけた。

北川先生の収集の理念として「学術的な希少性だけでなく、自然の造形の不思議と美しさを追い求める」ということがあった。

実際、展示された資料はとても美しいものや、形が不思議なものなど、感性に訴えるものが非常に多かった。

こうした一流の資料を展示する機会を得たことで、今回の企画展は、実物資料を通して来館者に訴えかけるという、博物館として基本となる目的を果たすことができた。



写真2 来館者の様子